

第 61 回桜井市展美術展 鑑審査講評

絵画の部

(藤本 信司)

例年に比べ出品数が減少しましたが、初出品の方を含め、技量の向上が見られ、継続出品者では、挑戦する姿勢や新たな表現の工夫があり、非常に厳しい審査になりました。今の気持ちや姿勢を大切にこれからも描き続けてください。反面、一度二度の塗りで終えていると思われる着彩もあります。軽く感じられます。重色や混色による効果等を生かして、色の深さや表現の密度を上げ、より魅力ある作品づくりに心がけてください。

〈市展賞〉 「眺望 倉橋溜池よりの音羽山」

小安 昇さん

風景と対峙して、その高まった描く気持ちが画面から伝わり、作品に引き付けられました。清涼感を与える緑の色調。山や木々、水面の描写力に技量の確かさが感じられる秀作です。

〈市長賞〉 「北国のぶな林」 喜多 祥介さん

一筆一筆丁寧に、作者の気持ちが伝わってきます。日頃の研鑽が感じ取れる労作と言えるでしょう。木や葉は、同系色と同形の繰り返して描かれているようですが、それが独自の世界感につながっていると思います。

書芸の部

(土家 利之)

昨年60回の大きな節目を迎えた市展・書芸の部は、今年も漢字・仮名・漢字仮名交じりの作品が多数出品されました。全国公募展のレベルに達している作品から、日ごろの練習の成果を素直に表現したものまでみるものを楽しませるに十分な内容となったのはとても嬉しいことです。私たちの生活から手書きの文字を目にすることが少なくなった昨今、筆で書かれた文字の魅力を楽しむ良い機会になりました。

〈市展賞〉 「臨 本阿弥切」 寺林 千幸さん

古筆・本阿弥切れを料紙7枚に臨書したもの。多くの字が集まって作り出される行(ぎょう)に、水の流れるような自然な美しさがある。複数の文字が連続している連綿が美しい。日ごろの熱心な稽古の様子がうかがえる。

〈議長賞〉 「来者猶可追」 江楓さん

漢字5書体の1つである隷書で書いた作品。中国・後漢のころに書かれた隷書は横長のものが多くみられるが、気にせずのびのびと筆を運んでいるところに魅力を感じる。「可追」は渴筆を用いて楽しみつつ筆を運んでいる。

写真の部

(村松 佳優)

今年も力が入った作品が集まり、審査も楽しく進めさせていただきました。一つの作品として、どのように人に見せるのかを意識したのが伝わってきます。その気持ちを大切に、これからも作品制作に取り組んでいただきたいと思います。

〈市展賞〉 「Vertical Silence (垂直の静寂)」

北 皖一さん

柱と人物だけのモチーフをモノクロで仕上げたシンプルな構成の作品です。そのシンプルさの中に光で生まれた明暗がうまく構成され、力強さを感じさせる作品になりました。

〈市長賞〉 「初夏の香り」 吉田 徹さん

画面に映る世界をソフトフォーカスとプリントの質感で印象深く仕上げられました。日中の日差しの強さも感じられ、初夏に出会った光景をうまく切り取った作品です。

〈教育長賞〉 「神域」 中城 康雄さん

作者が出会った光やモチーフとの出会いを、個性的な視点で切り取った作品です。光から感じる不思議な感覚を作品として見事に昇華されています。

造形の部〔彫刻、工芸〕

(増田 悦弘)

彫塑3点、工芸11点の出品がありました。

様々な材料を使った作品やその制作の手法が見られ、楽しく元気をもらえる展示になりました。

〈知事賞〉 「紙で作った船」 上原 純一郎さん

様々な形や質感を紙のみで表現した存在感のある作品です。形作りは勿論ですが、普段何気なく見ている紙の成り立ちや質まで考察し、制作に生かされている事に驚きました。制作手順も示されていて、物づくりに大切な心構えや姿勢を教えてくれる作品です。

〈議長賞〉 「能面(般若)」 森 一晃さん

彫りの技が際立つ作品です。ヒノキの彫りの上にゴフンと膠を重ね、内からの張りを強く感じさせます。髪を描き方にも表情の豊かさに繋がる工夫が伺え、制作に費やした時間と集中力、道具への愛着が感じられる作品です。

〈文化協会賞〉 「ペアの一輪ざし」 東西田 衛さん

深い茶色の釉薬と白萩が掛けられた、セピアと白のコントラストが美しい作品です。持ち手は華奢なリングが嫌みの無いアクセントになっています。

二つの形にやや変化を付け、優しく寄り添う姿を感じさせる作品です。また敷物が作品を引き立てています。